

史料編纂所と正倉院文書調査

Historiographical Institute and Investigation of Shoso-in Documents
YAMAGUCHI Hideo

山口英男

はじめに

史料編纂所（史料編纂掛の時代を含む、以下同じ）が正倉院文書の原本調査を開始したのは、今から114年前の1900（明治33）年10月のことであった。戦中・戦後の一時期をのぞき、調査はほぼ毎年継続して行われて現在に至っている。この間の調査成果として、『大日本古文書』（編年文書）・『大日本古文書 家わけ第十八 東大寺文書』（東南院文書）・『東大寺開田図』・『正倉院文書目録』・『日本荘園絵図聚影』・『日本荘園絵図聚影』 釈文編（古代）が公刊されている。

正倉院文書は総数約1万点といわれ、そのほとんどは、奈良時代の東大寺写経所に残された文書が正倉院宝庫内に一括して伝来したものである。内容は、写経所で作成された文書・帳簿を中心に、他所から到来した文書や、反故として持ち込まれた文書などからなる。反故文書の中には、戸籍・計帳・正税帳といった各種の律令公文が含まれている。江戸時代末から明治時代に整理成巻の作業が行われ、現状では、正集45巻、続修50巻、続修後集43巻、続修別集50巻、続々修440巻2冊、塵芥文書39巻3冊（合計667巻5冊）に整理されている。このほか、正倉院宝庫に伝わった文書として、正倉院宝物に付随する献物帳・出納文書・丹裏文書などがある。また、明治初年に東大寺から皇室に献納された東南院文書も正倉院宝庫に納められている。これらは、1884年以降、宮内省の所管となり、正倉院御物整理掛や奈良帝室博物館正倉院掛が管理に当たり、現在は宮内庁正倉院事務所の管理となっている。

1900年から現在に至る史料編纂所による正倉院文書調査は、調査の性格や内容により次の4期に区分することができる。

【第Ⅰ期】『大日本古文書』1～6の刊行

『大日本古文書』（編年文書）編纂のため正倉院文書の調査を開始した時期であり、2004年刊の第6冊で、大宝2（702）年から宝亀11（780）年に至る編年文書の刊行が一通り終了した。しかし、調査・編纂の基礎となる写本と原本との校合に問題が生じたため、新たに正倉院文書全巻の謄写本の作成を開始し、体制を組み直して調査・編纂を行うこととなった。

【第Ⅱ期】『大日本古文書』追加・補遺の刊行

新謄写本をもとに原本調査を行い、『大日本古文書』（編年文書）の追加および補遺を刊行した時期であり、1940年刊の第25冊（補遺2）により『大日本古文書』（編年文書）の編纂は終了した。

【第Ⅲ期】東南院文書と東大寺開田図の刊行

『大日本古文書 家わけ十八 東大寺文書』編纂のため、東南院文書と東大寺開田図の調査を実施した時期であり、1944年から1966年にかけて第1～4冊（『東南院文書』1～4）と『東大寺開田図』（『東南院文書』4図録）を刊行した。

【第Ⅳ期】『正倉院文書目録』の編纂・刊行

接続関係などを中心とした正倉院文書の再調査を行ってきた時期であり、1961年から作業に着手し、1987年以降、調査成果を収録した『正倉院文書目録』の刊行を開始し、現在に至っている。

1) 『大日本古文書』の刊行開始

1900年、史料編纂掛による『大日本史料』と『大日本古文書』の出版が決定された。その「出版趣意書」によれば、『大日本古文書』は当初、あらゆる種類の古文書を年次にしたがって編纂する方針をとっていた。編纂は奈良時代から始まり、対象となる古文書の大部分は正倉院文書であった。同年10月、出願により史料編纂所による初めての正倉院文書原本の調査が行われ、以後、例年秋の曝涼期間に継続して原本調査が行われた。

1901年7月に『大日本古文書』（編年文書）の第1冊、同12月第2冊、1902年10月第3冊、1903年3月第4冊、8月第5冊、1904年2月第6冊が刊行され、大宝2年から宝亀11年にいたる古文書の編纂がひとまず終了した。しかし、実際に出版を始めてみて、当初の編纂方針は変更を余儀なくされた。1904年6月より、並行して『大日本古文書』（家分け第一高野山文書）の刊行が始まるが、その例言は「社寺旧家等ニ保存セラルル古文書ノ纏マレルモノハ、之ヲ家分ケトナスコト、種々ノ点ニオイテ便宜」なりと述べている。編年文書の編纂は奈良時代にとどめ、以後の時代については家わけ文書として編纂されることとなった。

正倉院文書の調査も困難に遭遇した。当初は、正倉院文書の写本である「大学（図書館）本」を主たる底本とし、原本と校合して出版を行う計画であったが、原本調査の結果、「大学本」には誤写脱漏が多く、紙背文書を含めて正倉院文書の大部分についてあらためて謄写を行う必要のあることが判明した。しかし、当初の計画では時間的余裕がなく、第6冊までは謄写校合を十分行うことなく出版せざるを得なかった。

このため、宮内省側の配慮によって、1903年と1904年の2度にわたり、正倉院宝庫の秋の曝涼が終了した後の閉封中に正倉院文書を東京に移送するという便宜がはかられることとなった。1903年12月、正倉院文書730余巻（東南院文書を含む）を東京の正倉院御物整理掛に移送、翌年1月より史料編纂掛から派遣された掛員・写字生による謄写校合が行われた。1904年秋の曝涼期間に一旦正倉院に還納されたが、謄写校合作業はなお半ばに達しない状況であったため、同年の曝涼終了後、再び東京の宮内省へ移送され、史料編纂掛による作業は1905年5月に終了した。以後は、この新謄写本を利用して『大日本古文書』（編年文書）の訂正・補充が行われることとなった。

なお、正倉院文書の写本は、多くが整理成巻の作業に際して作成されたものである。はやくは、江戸時代末期の天保年間に、正集成巻の作業を行った穂井田忠友によって模写本が作成された。その転写本も多く作られ、各所に流布した。明治以降になると、まず統修・統修別集・統修後集が、

1882年までに浅草文庫において成巻された。ついで、続々修が、1894年頃までに正倉院御物整理掛において成巻された。また、内務省図書局において、1881年以前に塵芥文書の成巻も行われていた。これらの整理の際に、各機関では影写本・謄写本を作成しており、また作業に参加した小杉楹郵や大橋長憲らの手元にも写本が残された。

2) 原本調査の進展

『大日本古文書』1～6の刊行後、1905年5月に完成した謄写本をもとにした正倉院文書の原本調査が毎年継続して行われ、その成果は『大日本古文書』7～23(追加1～17)、24・25(補遺1・2)として刊行された。追加1となる第7冊は1907年に刊行されたが、追加2の第8冊が刊行されたのは1912年であった。この間5年の空白があるのは、文書を編年順に収録する作業に時日を要したためであろうか。その後は、関東大震災後の数年間を除けば、3年に2冊程度のペースで刊行が進んだ。追加17冊の刊行は約30年を要して1937年に終了し、1939・40年に補遺が刊行された。

この間の調査は、謄写本をもとにして、原本との校合を文書の編年順に進める形で行われた。その内容については、『史料蒐集復命書』の記述や、謄写本への調査所見の書き込みからうかがうことができる。文書の年代推定や、断簡に分かれた文書の接続復原の作業も実施されており、『大日本古文書』に収録された各文書の配列には、こうした調査の成果が生かされている。

1929年から1934年には、正倉院宝庫から新たに発見された丹裏文書の調査が行われ、その所見は『正倉院御物丹裏文書』として整理され、釈文は『大日本古文書』25に収録されている。また、1933年からは東大寺が献納した聖語蔵(旧尊勝院経蔵)経、1935年には御物勘検出納文書の調査に着手し、並行して作業が進められた。

3) 東南院文書と東大寺開田図

『大日本古文書』(編年文書)の刊行に目処がつくと、引き続いて『大日本古文書 家わけ第十八 東大寺文書』の編纂のための東南院文書の調査が、1936年頃から本格的に行われるようになった。東南院文書は、1872年に東大寺から皇室に献納され、その後正倉院宝庫に納められたが、もとは同寺の上司倉(油倉)にあった印蔵に収納されていた文書である。

東南院文書については、写本に書き込まれた辻善之助の識語から、既に1900年に調査が実施されたことがわかる。1903・04年には、正倉院文書とともに東京に移送され、謄写本が作成された。1922年にも『大日本史料』第一編関係の文書の調査が行われており、この頃から部分的な調査が適宜実施されていた。

東南院文書の調査は、文書の巻次ごとに行われ、それと並行して草名・花押・印章の模写も実施された。この結果、1944年に第1冊として『東南院文書』1が刊行された。しかし、正倉院での調査は1940年以降中断されており、出版も戦争末期には停止された。戦後になって、1950年から調査が再開され、1952年・54年に『東南院文書』2・3が刊行された。

その後1960年までの調査の中心は東大寺開田図であった。東大寺開田図は、奈良時代の東大寺領の荘園図であり、明治初年に東南院文書とともに東大寺より皇室に献納されたものである。1958～60年に写真撮影が行われ、それを掲載した図録集として『東大寺開田図』(『東南院文書』4図録)

が1965年に刊行された。同年に東大寺開田図の追加調査を実施した上で、翌1966年に『東南院文書』4として釈文が刊行された。この時期には、並行して東南院文書の再調査が実施された。これは、既刊の『東南院文書』を改めて原本で校正する作業で、その調査所見を書き込んだ刊本が「定本」として史料編纂所の古文書古記録部門（古文書室）に備え付けられている。

4) 史料学的調査と『正倉院文書目録』

1961年からは正倉院文書の調査を再開することとなった。断簡の表裏関係や、前後の接続と関わる左右端の状態など、文書の様態に関わる情報を蓄積することに主眼を置き、正集から巻次順に進められた。初めは試行錯誤的な調査であったが、徐々に調査方針が固められていった。1967年に『東京大学史料編纂所報』が発刊されて以降は、断簡の接続、文書・継文の復原について判明した内容が、「採訪調査報告」等として逐次掲載されるようになった。

正倉院文書は古代史研究の基本史料であることから、学界には原本の持つ諸情報の研究利用に対する強い期待があり、1958～60年には古代史を代表する研究者による戸籍計帳の調査が実施され、その成果が学術誌に掲載された（『史学雑誌』68-3, 69-2・3）。そうした学界の期待に応える意味から、史料編纂所の調査情報の公表の方法が検討され、その結果、断簡1点（表裏）ごとの接続情報を中心とした目録形式の調査報告である『正倉院文書目録』を刊行する計画が1974年に決定された。巻次順及びその関連文書の調査が、正集は1967年頃までに、続修は1979年までにひと通り終了したことをうけ、1987年に『正倉院文書目録』1（正集）、1988年に2（続修）が刊行された。その後は5年に1冊ほどのペースで3（続修後集）、4（続修別集）、5（塵芥）、6（続々修1 第1帙～第4帙）と刊行は進んでいる。現在は2015年刊行予定の7（続々修2 第5帙～第7帙）編纂のための調査を実施している。

この間、2005年に『大日本古文書』（編年文書）25冊の全文データベースの公開を開始した。2010年～2011年には史料編纂所特定共同研究「正倉院文書に関する史料学情報の学術資源化連携」を実施し、それを引き継いで科学研究費・基盤研究（A）「正倉院文書の多元的解析支援と広領域研究資源化」によりデータベース SHOMUS の構築を2012年から4年計画で進めている。また、東大寺開田図について、1988～2002年に史料編纂所が刊行した古代中世荘園絵図の図録集『日本荘園絵図聚影』に『東大寺開田図』と同じ写真図版を掲載した。ついで『日本荘園絵図聚影』釈文編を編纂することとなり、2003～05年に東大寺開田図の原本調査を実施し、新たな釈文図（釈文＋トレース図）と原本情報を収録した第1冊（古代）を2007年に刊行した。東南院文書についても、2009～11年に全巻の高精細デジタル撮影を行った。

*本稿は、1997年に史料編纂所1階ロビーで行われた展示「正倉院文書調査の100年」の解説（『東京大学史料編纂所報』33に掲載）を補訂し、新たに第4項を加えたものである。

参考文献

- 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史4 1987年
東京大学史料編纂所編『東京大学史料編纂所史料集』2001年

西洋子『正倉院文書整理過程の研究』2002年 吉川弘文館

皆川完一『正倉院文書と古代中世史料の研究』2012年 吉川弘文館

【参考資料】

資料1 神奈川及び奈良二県下史料蒐集復命書（明治三十七年） ○『史料蒐集復命書』一四

明治三十七年（中略）十一月十二日（中略）奈良県へ出張ノ命ガ下リマシタ、（中略）十四日東京ヲ発シ、翌日奈良ニ着イテ、十二月十六日マデ凡ソ三十余日滞在イタシマシタ、（中略）

奈良県下ニ於ケル用件ハ、主ニ正倉院文書ノ校合謄写デアリマシタ、尤モコノ事ニツイテハ、一昨年十二月三上部長ト共ニ呈出シマシタ復命書ニ述ベマシタ通り、去三十三年以来ノ継続事業デ、同年（明治三六年）十二月勅許ヲ経テ正倉院文書ヲ東京ニ御持帰りト相成、虎ノ門ナル正倉院御物整理掛デ保管サレ、翌年一月以後写生字ヲ派遣イタシマシテ、続々修ノ全部、続修後集及び東南院文書ノ一部ヲ謄写シマシタガ、何分多数ニ上ルコト、テソノ校合マテ功ヲ竣フル都合ニ運ビマセンデシタ、シカシ特別ノ御取計デ、正倉院御物整理掛ガ一時中止セラレマシタノニモ係ハラズ、今（明治三十七年）一応東京へ御持帰ヲ願ヒマシテ宮内省内ノ一室デ謄写校合ヲスル事トナリマシタ、ソレデ昨年ノ通り掛員及び写生字ヲ派出シマシテ、本年五月漸ク全部功ヲ竣ヘマシタ、回顧シマスレバ特ニ勅許ヲ蒙リ着手シマシタ正倉院文書ノ謄写校合ハ、凡ソ七百卷ノ大部ニ及ビ、ソノ間前後六ヶ年、宮内大臣子爵田中光顕氏、正倉院御物整理掛長子爵杉孫三郎氏ヲ始メ非常ノ好意ヲ以テ便宜ヲ与ヘラレ、今日コノ報告ヲ呈出スルニ至リマシタノハ光荣ニ存ジマス、（中略）

右謹テ復命致シマス、

明治卅八年五月廿九日

文科大学助教授兼史料編纂官 黑板勝美

東京帝国大学総長理学博士山川健次郎殿

資料2 奈良県下史料蒐集復命書（大正一一年） ○『史料蒐集復命書』三二

大正十一年十一月三日勝美（中略）史料蒐集ヲ命ゼラレ同月六日ヨリ同十二日迄奈良市ニ滞在シ正倉院文書ノ調査ニ従ヘリ史料編纂官補三成重敬同雇松平年一ハ勝美ニ随行セシガ五日間猶ホ留リテ調査ヲ継続シタリ

（中略）本年ハ昨年ノ調査ニ繼イデ宝亀四年ヨリ同七年ニ亘レル経師等ノ請筆墨請暇食口月借錢等ニ関スルモノ凡五卷四百余通ヲ対校シ且ツ字体書風紙質等ニヨリテ記年ナキモノ、年代ヲ推定シ断簡零墨ノ離レタルモノヲ連続セシメテ大日本古文書ノ稿本ニ類取セリ以上ノ古文書ハ奈良朝末期ニ於ケル写経事業ノ尚ホ盛ナリシヲ見ルニ足ルベクソノ間本邦経済史社会史等ノ研究者ニ取リテ最も重要ナルモノアリ例ヘバ月借錢解ノ如キ（中略）元利ノ割合質物其他貸借関係ヲ明ニスルコトヲ得バク食口帳ノ如キハ各人一日ノ食料及び食物ノ種類分量等ヲ詳ニシ当時ノ日常生活ノ一部ヲ髣髴スベシ以テ如何ニ正倉院文書ガ断簡零墨ト雖トモ我カ国史ノ研究上重要ナルモノナルカラ知ルニ足ラン又正倉院文書中嘗テ東大寺東南院ニ蔵セラレタルモノニ我ガ史料編纂掛ニ於テ目下編纂出版中ニカ、ル大日本史料第一編ニ必要ナルモノ多シ因テ今回校合ニ従事セル傍ソノ平安朝時代ノ太政官牒

ニツキ弁官ノ自署ヲ撮影シタリ就中寛平七年三月十九日ノ太政官牒ハ當時有名ナル儒家ノ一人タリ
シ紀長谷雄ガ右少弁トシテ遣唐副使ヲ兼ネシ折ノモノニカ、ル

右復命候也

大正十一年十二月二十二日

史料編纂嘱託 黑板勝美 (印)

東京帝国大学総長古在由直殿

資料3 奈良県下史料蒐集復命書 (昭和七年)

○『史料蒐集復命書』四三

昭和七年十月十五日史料蒐集ノ為メ奈良県下ニ出張ヲ命ゼラレ勝美重敬并二年一ハ同月廿四日
ニ、朔巳ハ十一月二日ニ出發、同月六日帰京セリ、

(中略) 一昨秋御曝涼ノ際ヨリ着手シタル丹裏文書ノ調査ヲ継続シ、(中略) 合計七十裏ヲ終了セ
リ、ソノ中特ニ注意ニ上リタルモノ二三ヲ挙グレバ第八十五号ノ外包紙ニ天平勝宝八歳二月廿七日
造講所解アリ、コレニ押捺セラレタル「向政」ト印文アル方約一寸二分ノ朱印ハ初見ノモノニカ、
リ、他ノ朱印トソノ類例ヲ異ニセルモノナリ、マタ第一百十六号ノ内包紙ニアル造東大寺司牒案ハ、
長門国司ニ宛テラレタルモノニシテ、第一百十九号ノ内包紙ニアル文ニ接続シ、即チ長門国ヨリ進
上セル熟銅生銅ノ斤数ヲ勘シ、挾抄水手ノ功食并ニ部領舎人ノ食料等ヲ注セリ、年記ヲ缺クト雖モ、
天平勝宝六年二月卅日ノ西市庄解ノ裏ヲ反シテ書セルモノナリ、共ニ希珍ノ文書トイフベシ、(中略)
更ニ他日ヲ期シテ調査報告書ヲ作成セント欲ス、

右復命仕候也、

昭和七年十二月十日

史料編纂業務嘱託 黑板勝美 (花押)

史料編纂官 花見朔巳 (印)

史料編纂官補 三成重敬 (印)

史料編纂官補 松平年一 (印)

東京帝国大学総長小野塚喜平次殿

資料4 奈良県下出張復命書 (大正一四年)

○『史料蒐集復命書』三五

大正十四年十月二十八日勝美(中略) 京都府下ニ出張ノ序ヲ以テ奈良県下ニ出張ヲ命ゼラレ、同
日静也、重敬マタ同県下ニ出張ヲ命ゼラル、勝美ハ十一月一日ヨリ三日間奈良市ニ滞在シテ(中略)、
静也ハ二日ヨリ五日間、奈良市ニ滞在シテ七日帰京シ、重敬ハ雇松平年一ト共ニ一日ヨリ十日間奈
良市ニ滞在シテ十一日帰京セリ、

今回出張ノ目的ハ正倉院ノ御物曝涼ニ際シ前年来勅許ヲ蒙リタル同古文書ノ校合等ヲ継続スルニ
アリ、本年度ニアツテハ主トシテ宝龜五年ヨリ同六年ニ亘レルモノニカ、リ、幸ニ連日晴天ナリシ
為メソノ進捗見ルヘキモノアリ、請筆請墨等ノ手実二百五十六通、食口帳断簡一卷并ニ経律論等目
録断簡十四点ニ及ベリ、而シテ経律論等ノ目錄ハ蠹損腐蝕等甚シク所謂塵芥文書ト称セラル、諸卷

中ニ散在セルモノニシテ、悉ク記年ヲ闕キ、尤モ難校ノモノタルヲ以テ、子細ニ原本ヲ対照シテ之ヲ連続シ、宝亀三年ノモノタルヲ発見セリ、

(中略)

右復命候也、

大正十四年十二月十八日

史料編纂業務嘱託 黑板勝美 (花押)

史料編纂業務嘱託 藤懸静也 (印)

史料編纂官補 三成重敬 (印)

東京帝国大学総長古在由直殿

山口英男 (東京大学史料編纂所、人間文化研究機構連携研究員)

(2014年1月7日受付、2014年3月18日審査終了)